

廖 郁? (奨学生)

台湾 (台中県)

千葉大学人文社会研究科文化科学研究  
日本に留学して、一番楽しかったこと  
一番悲しかったこと



時を遡ること 1997 年 9 月 17 日、私は交換留学生として文化大学の姉妹校、天理大学に籍を置き、一年間留学生生活を満喫しました。台湾に帰り、日本語に関する仕事に就きましたが、日本語のレベルをさらに高めなければならぬと実感していたため、再び日本に戻る決意をしました。十年後の今、日本に戻って自分の大好きな日本語を研究することができることは夢にも思いませんでした。私にとっては人生の中で最大の幸福です。日本に来て早くも五年経ちましたが、全然気づきませんでした。

日本に来て良いことばかりではなく、文化や考え方の違いから日本人の友人の誤解を招き、喧嘩したこともあり、悲しい思いもしましたが、その喧嘩のおかげでその友人とは今ではとても仲が良くなりました。台湾と日本は地理的にも歴史的にも近い国どうしですが、私は日々日本人の人々に接し、カルチャーショックを絶えず受けながら、日本の文化を少しずつ体験しております。

留学生生活には、経済的な困窮状態の辛さもありますが、悩む暇がないほど毎日授業や論文で多忙で、理想的な論文が書けるようにただひたすら前向きに頑張っています。日本で日本語と中国語との対照を研究することができるのは、すべて周りの人々のおかげです。学内外を問わず、素敵で良い先生方が私の研究をいつも熱心に指導し支えて下さり、また大学の素晴らしい校風や充実した研究設備に恵まれ、そして日本人の友達が日本文化を教えてくださいることが一生の宝物です。感謝の気持ちでいっぱい、台湾に帰ってもこの思い出を大切に、一生忘れません。

博士後期課程に辿り着きましたが、現在博士学位論文を執筆中で、忙しいながらも充実した研究生生活を送っております。勉強は一生続くもので終わりがなく、自分にはまだまだ足りない面が多く、もっと勉強したいと強く思っております。

## 平和の重さ

早稲田大学院商学研究科

張 瀟

子供のときから中国で流行っている「広島の恋」という歌があって、いつも歌を聴きながら、広島の様子を想像していました。私にとって、広島は繁栄、荒涼、ロマンスと涙の記憶を抱えている神秘的な都会でした。この夏、岡本財団のおかげでやっと自らが広島へ行って見ることができました。

8月5日の朝九時、一行六人新幹線のホームで集合しました。キャプテンの佐野先生、中国ウイグル族の方が二人、漢民族の方二人、ラオスの方一人でこのチームを結成して、背景がそれぞれですが、みんなは旅に出かける興奮で目がキラキラしています。新幹線での四時間はおしゃべりと笑い声で、あっという間に終わりました。

新幹線の後は船。船をおりたら、千葉とまったく別の景色の宮島が目の前で広がっています。青い空、緑色の山、赤い神社と大鳥居、白い平舞台...神様が意識的に原色を使って、この古くて神秘的な嶋を作ったのでしょうか。そして、外国人の観光客が非常に多かったです。不思議なのは、いろいろな顔がこの異国の景色にとっても馴染んでいたことです。この日の太陽はとてもきれいで、観光客だけではなく、嶋の鹿まで穏やかな表情をしていて、家に居るように散歩しています。私たちがロープウェイに乗るとき、三人のフランスの観光客とグループ分けの誤解が起こって、最後みんなが笑ってしまいました。その後も、この三人のフランス人と何回も偶然に出会って、ほとんど言語が通じないのに、友達になりました。最後集合写真も撮りました。シャイでフレンドリーな三人のフランス人の笑顔がとても印象深く、今思い出しても微笑みが浮かび上がります。

宮島から広島に帰って、お好み焼きを食べに行きました。お店の店長さんがとても親切で、たくさんのおしゃべりをしてくれました。ホテルに帰るとき、私がお土産を電車の中に忘れてしまって、駅員さんのおかげで、早く見つけられました。駅員さんもとても優しく、窓口からホームまで私を追いかけて、い

ろいろと丁寧に教えてくれました。広島が本当にきれいでフレンドリーで、居心地いい都会ですね、と私はわくわくしながら寝ました。しかし、このわくわくしている気持ちが翌日の朝からちょっと変わりました。

8月6日朝、平和記念公園で各国の人々が混雑していました。原爆ドームが目に入る瞬間、心が揺さぶられました。この鉄筋コンクリートの残骸が周囲の緑や建物と非常に鮮烈な対比になって、原爆の残酷を人々に曝け出しています。8時15分に鐘が鳴り、公園にいる人々がきれいな青空と太陽の下で横になって、原爆でなくなった人たちに黙祷しました。63年前、同じようなきれいな朝だったでしょう。違うのは、一度倒れた人たちは二度と立つことができなくなったことです。静かさが一瞬に崩れて、町が火に包まれ、人々も真赤になりました。無数の人の人生がこの一瞬で狂ったことでしょうか。公園でもらった折り紙を握って、原爆資料館に入りました。資料館の中で私は二度の衝撃を受けました。原爆後の景色があまりにも無残である。この私が大好きになった町は瞬間に平らになって、すべてが変形しました。原爆後の第一枚写真を採る記者さんはカメラを握って、この残酷の景色を見て、シャッターを押すことが30分もかかりました。被害は原爆当時だけではなく、放射線などの汚染で何十年、死ぬまで苦しんでいる人たちもたくさんいます。戦争というのは、人間を地獄に変えるものです。手の中の一枚一枚の折り紙に込められている涙、戦争への訴え、平和への憧憬を身にしみて感じました...

資料館から出た後の旅も、楽しく過ぎました。しかし、私はこのように楽しさを満喫した以外に、感謝の気持ちと責任感を感じています。平和に感謝したいです。平和だからこそ、私は日本に留学できて、いろいろな文化の異なる人が集まって旅行できます。宮島の穏やかで壮麗な景色が見えて、広島への親切が感じられます。戦争はしてはいけません。人々が平和を取り戻し、維持するために、力をあわせなければなりません。この責任感を常に、代々持つべきです。

広島への旅行が記憶の中に刻まれました。永遠の平和を祈ります。